「男、突っ走る！」

第29回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（18）　中央高校3年2組生徒

木内　孝志（47）　雅也の父
木内　真保（45）　雅也の母
木内　健次郎（14）　雅也の弟

濱口　寧々（18）　中央高校3年2組生徒
志田　悠喜（18）　中央高校3年2組生徒
田崎　良樹（18）　中央高校3年2組生徒
山辺　一磨（18）　中央高校3年2組生徒
中岡　壮吾（18）　中央高校3年2組生徒
滝　由紀恵（18）　中央高校3年2組生徒
杉島　恭平（18）　中央高校3年2組生徒
水澤　光太（18）　中央高校3年2組生徒

尾形　安代（54）　中央高校3年2組担任
入沢　茜（32）　中央高校3年2組副担任

1　中央高校・職員室

雅也が入沢に参考資料を渡している。

雅也「無事に、試験終わりました。いろいろご協力いただき、ありがとうございました」

入沢「お疲れ様。本当に頑張ったわね」

雅也「大晦日と元日以外は、ひたすら勉強してました。茜先生のアドバイス通り、過去問をただひたすら解いて、苦手な分野と間違えやすい専門用語を復習して……ただひたすら、その繰り返しでした」

入沢「松野先生も関心してらしたわ。よく勉強やってきたって」

雅也「でも、情報処理検定の一級はあともう少しのところでダメでした……。三冠達成したかったですけどね」

入沢「それは本当に残念だったわよね……あと数点だったもの」

雅也「茜先生も、結果見たんですか？」

入沢「もちろん。まあ、あの問題はある意味引っ掛けだったからね、あれで正解できた

人は大したもんだと思うわ」
雅也「まあ、二冠達成はできたので、それで十分です。あとは、ＩＴパスポートさえ合格していれば」
入沢「そうね」
雅也「ＩＴパスポートの合否結果って、いつ届くんですか？」
入沢「基本的に受験してから、おおよそ三週間って聞いてるから、早くて今月末かしら」
雅也「そうですか……」
入沢「自動車学校にも行きだしたんでしょ？」
雅也「ええ」
入沢「そっちの勉強もあって、学校の授業もあって、勉強の掛け持ちも結構大変だったんじゃないの」
雅也「自動車学校は、正直後回しでも良いかと思ってたんです。別に、今すぐに試験受けて、卒業して、免許取得しろってわけじゃないんですから。ＩＴパスポートとか、ある程度こっちの試験が終わってからでも

良いと思って」

入沢「それもそうね。一番優先すべきは、正直ＩＴパスポートだったもんね」

雅也「そりゃ国家資格ですし、受験料だって普段の情報処理検定の倍以上もかかってるんです。せっかく受けるんだったら、ちゃんと受験料の元を取るぐらいにならないと。せっかく受験したのに、不合格にでもなったら元も子もないじゃありませんか」

入沢「（笑いながら）木内君は、受験料の元を取るために頑張ってたの？」

雅也「検定受けるのだって、タダじゃないんですから。お金払っている以上、ちゃんと結果出さないと。それにその受験料だって、出してくれてるのは親なんですから」

入沢「やっぱり、長年お父さんが家にいないと、家族に対する考え方も変わってくるのかしらね」

雅也「どうでしょうね。みんな、検定勉強なんて大してやってないんじゃないんですか

ね。何となく、授業の流れで受けるみたいな子が多いと思いますよ。まあ、僕だって今ここでＩＴパスポートや情報処理検定を取得したところで、今後何かの役に立つことがあれば良いんですけど」

入沢「脚本家になったとき、ＩＴの専門的なドラマを作ることがあったときに、役立つんじゃないかしら」

雅也「そういう日が来ると良いんですけどね」

入沢「脚本は、今何か書いてるの？」

雅也「書きたい作品は、結構あるんですけどね。でも、ここしばらくは検定勉強に専念してたこともあって、なかなか書く余裕がなくて」

入沢「でも、これで専念できるじゃない」

雅也「そうなんですよ。僕、貧乏性ですからね、本当は何か書いてないと落ち着けなかったんです。これから、専門学校始まるまで、春休みも長いですから、それまでにまたたくさん作品書こうと思います」

入沢「今のうちに、木内君のサインでももらっておこうかしら」
雅也「有名になったら、それオークションに出品しないでくださいよ」
入沢「するわけないじゃない、そんなこと」
雅也「ありがたいことに、周りの子はみんな応援してくれてますからね。だから僕も、頑張ろうって張り合いが生まれます。いつか、このクラスのことも書きたいなって思ってるんです」
入沢「そうなったら、みんな喜ぶんじゃないかしら」
雅也「二組は、とにかく個性的な子が多いですからね。誰が主人公になるのか分からなくなりますね」
と、安代が入ってくる。
雅也「（安代を見ながら）あ、安代先生を主人公にするのも良いかもしれないですね」
安代「何の話？」
入沢「木内君、いつか二組のことを脚本に書

きたいって話をしてたんです」

安代「二組の？」

雅也「個性の塊みたいなクラスでしょ。脚本にしたら面白いかなと思って。それで主人公を誰にしようかなと考えたんですけど、その個性的な生徒たちに振り回される安代先生を主人公に持ってくるのが良いかなと思ったんです」

安代「私が、主人公？」

雅也「先生目線で、様々な生徒との交流を描けばエピソードも膨らむと思うんです。今回はこの子の話、次はこの子の話って、脚本書く上でエピソードのネタは多い方が膨らみますからね」

安代「それが形になったら、ぜひ見てみたいわ」

雅也「任せといてください」

笑い合う一同。

2　名古屋の街

雅也が歩いている。

N「この日は、入学前オリエンテーションが専門学校で行われることになっており、僕はこの日初めて、一人で電車を乗り継ぎ、名古屋の街に出ていきました。これから、この生活が三年間続くのかと考えたとき、僕はふと期待と不安の気持ちを、同時に持っていたのでした」

3　木内家・居間（夜）

孝志が台所で夕飯の支度をしている――テレビを見てくつろいでいる健次郎。と、ドアが開き、真保と雅也が帰宅する。

雅也「ただいま」

真保「ただいま」

健次郎「おかえり」

孝志「おかえり。もうすぐで夕飯できるからな」

真保「これから三年間、毎日雅を駅まで送迎

しなきゃいけないと思うと、気の長い作業をする感覚になるわね」

雅也「バスで行くから大丈夫だって」

真保「けど、そのバスだって運賃かかるのよ。それに本数も少ないし、昼からの授業とかの時、どうするのよ。時間見て家出ないといけないでしょ」

雅也「早く行って自習ができるんだったら、それでも良いかなって思ってる」

真保「自習できるんだったら、その間に原稿書けば良いものね」

雅也「まあ、どれぐらい創作活動ができるかだよね。授業課題とかで、長い脚本書く宿題が出たらどうなるんだろうって思うし。それでも、ひたすら書き続けることがやっぱり大事なのかもしれない」

真保「まあ、学校生活の中で、いろいろヒントもあるでしょう」

雅也「そうだね」

苦笑している雅也。

４　中央高等学校・コンピュータ室

入沢が授業をしている――雅也たちがそれぞれ席に着いている。

入沢「それでは、今月末に行う、小学校へのパソコン授業について説明をしていきます。（とスライドを見せながら）皆さんには、すぐそこにある西小学校の四年生を対象に、パソコン授業をやっていただきます。各クラスの役割分担については、情報の先生方と相談して決めました」

と、分担表のスライドを見る雅也たち。

雅也「先生。僕の、このＳＶって何ですか？」

入沢「これは、スーパーバイザーです」

雅也「スーパーバイザー？　え、具体的に何やるんですか？」

入沢「簡単に言うと、総監督です」

雅也「え、僕がそれをやるんですか？」

入沢「情報担当の先生方は、満場一致でしたよ」

悠喜「よッ、バイザー木内」
雅也「やめれ、その言い方」
恭平「スーパーバイザー木内（と拍手をする）」
一同、拍手をする。
雅也「分かりました。スーパーバイザー頑張ります（と立ち上がって、一同に礼をする）」
N「小学校へのパソコン授業訪問で、僕は思いがけず全体を仕切るスーパーバイザーを任命されたのでした」

5　同・3年2組教室
雅也がノートにメモをしている――と、
良樹がやってくると、
良樹「なあ木内。広報委員会で頼まれてた文集の原稿って書いたっけ？」
雅也「ああ、あれね。（と鞄からプリントを出すと）一応書いてみた。表現とか、もし気になることがあったら教えて」

良樹「まあ木内が書いた文章だから、よっぽど大丈夫だとは思うけど」
雅也「どうかなぁ。井深先生からは、もしページが余ったらポエム書いてみないかって言われたけどさ」
良樹「良いじゃん、書いてみたら？」
雅也「脚本はたくさん書いたことあるけど、詩とかポエムはどうも難易度が高くて」
良樹「この原稿って直接生徒会に持っていけば良いんだよね？」
雅也「そうみたい。広報委員会は、各自でこの原稿を書くのが仕事で、委員会全体で何かやるってのはなさそうだね」
良樹「木内が広報委員長で、俺が副委員長で十月からやってきてるけど、特にこれといった仕事ないもんね」
雅也「俺なんて始めと終わりの、起立と礼言うだけだからね。後は全部先生がやってくれるから。まあ俺としては、そっちのほうが楽で良いんだけど」

良樹「確かに。面倒な仕事押し付けられるよるかは良いかもしれないな」
雅也「そうだよね」
良樹「それに、スーパーバイザーも仕事だってあるしね」
雅也「そうなんだよ。びっくりしたよ、いきなりあんな大役任命されてさ。先生たちで決めたって言われたら、断るに断れないでしょ」
良樹「でも、このクラスだったら木内だと思う。それは、満場一致でみんな同じこと思ってるんじゃないかな」
雅也「だと良いけど。あ、そっちのタイムスケジュールも作らなくちゃ。卒業まで残りわずかなのに、休む暇ないね」
良樹「何だかんだ忙しそうにしてるほうが、木内っぽくて良いけど」
雅也「良樹にだって、ちゃんと役割あるんだから、よろしく頼むよ」
良樹「分かってるよ」

笑い合う雅也と良樹。

6

小学校・パソコン室

雅也を始め生徒たちと共に、小学生たちが各パソコンの前の席に座っている――悠也がスクリーンに映ったパソコンの画面を見ながら説明をしている。

N「翌週になり、僕たち三年二組は高校の近くにある小学校に出向き、四年生を対象にしたパソコン教室を開催しました。それぞれ役割を決め、画面の説明、印刷の仕方、文字の打ち方、タイピングのお手本など、小学生たちが興味を示してもらえるような内容で行っていきました」

×　×　×

小学生たちが、慣れない手つきでパソコンに文字を打っている――児童一人につき、二組の生徒が一人ずつ付き添っており、随時教えている。その様子を雅也が回りながら見ている。

由紀恵が全体の様子をデジタルカメラで撮影している。

寧々が雅也のもとにやってくると、

寧々「木内。予定より時間早いけど、みんなある程度文字打てたから、印刷のやり方について教えたほうが良いかも」

雅也「そうだね。じゃあ、そろそろ説明の準備に入って」

寧々「分かった」

と、寧々が部屋の前に来て準備を進める――そんな雅也と寧々の様子を微笑んで見ている入沢。

N「このクラスが一丸となって取り組む最後の行事が、このパソコン授業でした。三年間の集大成として、僕たち二組の生徒は、団結をしてこのイベントを成功に導くことができたと、クラス全員が思っていました」

×　×　×

二組の生徒たちが残っている――前に立って雅也が話している。

雅也「皆さん、今日は半日お疲れ様でした。四年一組と二組と、こんなにもたくさんの子どもたちのパソコンの操作や文字の打ち方、印刷の仕方を教えることは、それぞれのレベルもあって大変だったと思います。でも、司会やタイムキーパー、各パート教える人、それぞれが自分の役割を行うことができたのではないかと思っています。三年間の集大成として、おそらくこのクラスのみんなで何かを成し遂げることは、今回のこのパソコン授業が最後だと思います。だからこそ、この三年二組が一丸となって取り組めたのではないかと思っています。僕も、思いがけずスーパーバイザーという役を任されましたが、皆さんに助けていただいて、僕もこの担当を何とか終えることができました。卒業を控えるこの時期に、有終の美を飾るような素敵な時間になったと思います。本当に皆さんありがとうございました。お疲れ様でした」

と、礼をする――拍手をする入沢と生徒たち。いつまでも頭を下げている雅也。

7　中央高校・コンピュータ室

パソコン授業の様子を収めた写真データを画面越しに見ている雅也、一磨、壮吾、由紀恵。その近くでパソコンに文字を打っている光太。

雅也「結構写真撮ったね」

由紀恵「素材は多い方が良いと思って」

雅也「さすがです」

光太「パソコン授業のレポート文、もうちょっとで完成するから待ってて」

雅也「はいよ」

由紀恵「それにしても、このパソコン授業の様子を、学校のホームページに掲載するなんて、初めから分かってたらそれっぽく写真も撮ったのに」

雅也「思いつきだったんじゃないの。俺たち、

授業でホームページの更新とか、専門のプログラミング言語も結構覚えたからね。最後まで、情報活用コースらしいことを、先生もさせたいんじゃないかな」

一磨「なるほどなぁ」

雅也「こういう風にホームページに掲載すれば、記録にもなるし、俺たちにとっても良い思い出になると思う」

一磨「それは言えてるかもな。ホームページに載せて、情報活用コースに興味を示す中学生もいるかもしれないし」

雅也「ある意味、高校の宣伝をしているようなもんだよね」

由紀恵「今宣伝しても、私たちはもう卒業しちゃうけどね」

雅也「そういうこと言わないでよ、寂しくなっちゃうじゃんか」

壮吾「寂しいと思うからいけないんだよ。別に一生会えないわけじゃないんだし」

雅也「でも、毎日のように顔を合わせてたこ

のクラスのメンバーと会えなくなっちゃうんだよ。あのクラスで過ごすのが、最後だって思うと、やっぱりウルっとくるじゃん」

壮吾「うっちーは、繊細だな」

雅也「あれ、知らなかったの？」

壮吾「知ってた」

一磨「俺も」

由紀恵「私も」

光太「俺だって」

雅也「ちょいちょい、みんな揃って」

笑い合う一同――と、入沢が入ってくる。

入沢「今日はみんなお疲れ様」

雅也たち「お疲れ様でした」

入沢「みんな、それぞれの役割をちゃんとやってくれて、私もホッとした。最後の木内君の挨拶だって、みんなが頷いてて、最後らしくしっかりできたんじゃないかしら」

壮吾「うっちーバイザーのおかげだよな」

雅也「何だよ、うっちーバイザーって」

入沢「あ、これが今日届いたから、木内君に渡そうと思って（と封筒を渡す）」

雅也、受け取って書類を取り出す――

『ＩＴパスポート　合格証書』と書いてある。

雅也「これって……」

入沢「ＩＴパスポート、合格おめでとう」

雅也「合格した……」

壮吾「すげえじゃん」

由紀恵「すっご」

光太「うっちー、おめでとう」

一磨「さすが木内だ」

雅也「ありがとう……良かった、合格して」

入沢「あれだけ一生懸命試験勉強頑張ったんだもの。私は、ちゃんと木内君が合格してるって信じてたわよ」

雅也「ありがとうございます」

良樹「これで、何の後悔もなく卒業できるな」

雅也「うん。正直、今回のパソコン授業の準備してる間も、ＩＴパスポートのことが気

になってしょうがなかったんだよね……。
でもこれで、良樹の言う通り、何の後悔もなく卒業できる。ああ、本当に良かった……」

安堵の表情を浮かべる雅也。

N「水澤の書いたレポートと、舘が撮影した写真を掲載し、かっちゃんやそーぴがプログラミング言語を用いて作ってくれたホームページは、この数日後に公開されました。二組としてのイベントはこれで終わりを告げ、ついに僕たちは、卒業式を控えるのみとなったのでした」

つづく